

近年 秋ダイコンで問題になっている病虫害の紹介 岩井研究農場・酒井正彦

近年の気候変動に伴い、多くの野菜で栽培が年々難しくなっています。ダイコンも例外ではありません。特に残暑が厳しい秋の作型において、品質の低下だけではなく、様々な病虫害の被害が増えています。産地を訪問する中、今まで注目されていなかった病虫害による被害が増えていることが気になりました。

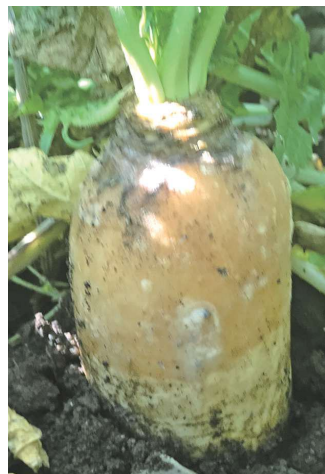
見慣れない病気や症状を誤認、見過ごした場合、思わぬ大きな損失に繋がる可能性があります。下記情報を基に適切な対応をとってください。

ピシウム腐敗病

病原: *Pythium ultimum* var. *ultimum* (ピシウム ウルティマム 変種 ウルティマム) 糸状菌(カビ)の一種で土壤中に生息しています。多犯性で、ダイコンだけではなく様々な植物に感染し、幼苗期に立枯れを引き起こすことでも知られています。本病の発病適温は20～30℃で、多湿条件を好み春や秋に発生が多くなります。

症状: 根部、特に首部や地際部から腐敗が発生します。症状は軟腐病や菌核病と似ています。しかし臭いは漬物臭に近く、進行すると菌糸が見られるようになりますが、菌核は発生しません。

対策: ①緑肥や堆肥は早めにすき込み、播種前に十分に分解させてください。
②発病株は早めに除去し、圃場外で処分してください。
③発生が多い圃場は土壤消毒を行ってください。
④排水性を向上させ、健全な土作りをお願いします。



斑点細菌病



病原: *Xanthomonas campestris* pv. *raphani* (ゼントモナス キャンペストリス病 原型 ラファニ) 細菌の一種で土壤中に生息しています。風雨によって飛散し、害虫や風などによる傷口や葉の組織から侵入します。春と秋に発生が多く、温暖多雨の年に激しくなります。

症状: 主に葉、根頭部に発生します。葉では白～灰色の病斑が発生します。根頭部では黒斑細菌病と同様に内部黒変が発生しますが、黒斑細菌病のような水浸状の黒変にはなりません。また本細菌が、出荷後に肌の表面で斑点症状を引き起こすことが千葉県農林総合研究センターより報告されました。

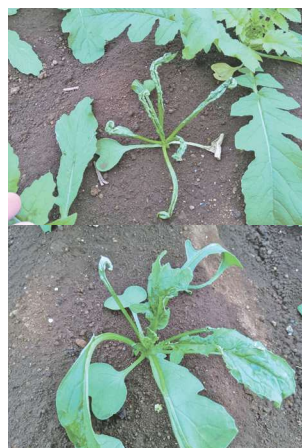
対策: ①登録農薬はありませんが、黒斑細菌病対策を兼ねて、本葉5～7枚期および台風や強風、大雨の後は、黒斑細菌病の登録農薬を散布して予防に努めてください。
②発病株は早めに除去し、圃場外で処分してください。
③生育中期以降に肥料切れを起こさない肥料管理が重要です。
④ダイコン収穫後の洗浄は、水压を低めに設定して行ってください。

ホコリダニによる変形葉

原因: ホコリダニの一種による虫害とされていますが、まだ詳細は不明です。

症状: ダイコンの幼苗においてホコリダニに寄生された株の新葉が変形します。ハイマダラノメイガ(シンクイムシ)による食害にも似た症状が発生し、半分が欠けたもの、細くなったもの、萎縮したものなど様々な変形葉が発生します。症状が軽微であれば、多少の生育遅延のみで、その後は正常に生育することも多いようですが、症状が重いとそのまま芯止まりとなり、生育が止まることもあります。特に高温乾燥が続く年に発生が多いようです。

対策: ① 1穴2粒以上播種し、間引き時に異常株を除去してください。
② 乾燥が激しい時は灌水を行ってください。



病虫害は発生後の対処は難しくなりますので、発生前の予防が大変重要です。また発生初期に適切に対処することで、被害の拡大を防ぐことができます。